校長室だより～燦燦～ №２２

実るほど頭を垂れる稲穂かな

2019.12.10

本日１２月１０日、ノーベル賞の授業式がスウェーデンのストックホルムで行われる。今年のノーベル化学賞は、旭化成名誉フェローの吉野彰さんが受賞した。受賞したとき以来ここ数日は、次から次へと様々な報道がされている。それらの中に、吉野さんへのインタビューとして、「座右の銘は何ですか」というものがあった。吉野さんは「実るほど頭を垂れる稲穂かな」と答えていた。いつも、この言葉を言い聞かせてきたとおっしゃっていた。

テレビの報道を見ていて、笑顔が素敵な方だと思った。全く偉ぶるところがない。座右の銘を聞いて、なるほどと合点がいった。この柔和な笑顔はこの言葉と共にあるのだと思った。日本人２７人目のノーベル賞受賞である。化学賞は、２０１０年以来８人目となる。吉野さんは、リチウムイオン電池を開発した。これならば、私のようなものでもその功績のすばらしさがわかる。小学校４年生の頃にイギリスの科学者ファラデーの「ロウソクの科学」を読んだというお話もわかりやすい。親しみのもてるノーベル賞受賞者である。吉野さんは、リチウムイオン電池の開発者としての責任があるともおっしゃっていた。

奥様がこれまたすばらしい。控え目だが芯の強い方だと感じた。ずっと吉野さんのことを心配し、支えてこられたのだろうと思う。吉野さんは誰よりも感謝しているはずである。授賞式にはご夫妻で臨むことになる。日本が世界に誇れるご夫妻である。

翻って、今の自分はどうかと考えてみる。「謙虚」をモットーにしてはいるが、果たしてどうだろう。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」これがなかなかむずかしい。実るほど頭を上げてしまうのが人間である。だが、そうなっては人間的な成長は望めない。

部活動の指導者を例にしてみよう。毎年のように全国大会にいく指導者がいる。だいたいタイプは２つに分かれる。大会会場にいくと、いかにもという態度でいる。なぜかサングラスをしている方が多い。選手への指示も、これまたいかにもいう感じである。まわりからすると、印象はすこぶるわるい。一方、この人がいつも全国大会にいく指導者なのかという感じの方もいる。偉そうにしていない。もう少し目立ってもいいのではと思ってしまうほどである。どちらのタイプが多いだろうか。私の感覚では前者の印象がわるいタイプのほうである。サングラスだけでなく服装や歩き方などが目立っているということもあるかもしれない。それだけ、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」はむずかしいのである。そもそも、そうなりたいと考えていない指導者が多いのも事実であろう。

身近なところでは、聖光学院高校野球部の斎藤智也監督はどうであろう。私の高校の同級生である。私が教頭をしていた中学校で講演をしていただいたことがある。その頃は、すでに甲子園に連続して出場していた。オーラはあるが、偉そうではない。自ら人間修行に励んでいる。その頃の私は教頭になり、生き方や哲学、人生論などの勉強をしていた。斎藤監督と話をしているうちに、同じ方から薫陶を受けていたことがわかった。同じ本を読んでいることがわかった。何だかうれしかった。こういう方が指導しているから聖光学院高校野球部は、勝つというか負けないのだと思った。今では、とても同級生とは思えない遠い彼方へ行ってしまった感がある。学校だけなく企業などからの講演依頼がひっきりなしと聞く。当然である。それだけの人物である。

斎藤智也監督も「実るほど頭を垂れる稲穂かな」のはずである。私も自分に言い聞かせる言葉の一つに加えたい。吉野彰さんの笑顔からは、今までやってきたことへの自信と誇りも感じられる。仕事や立場、ポジションは違っても、こうありたいと思う。